東日本大震災から10年

復興への思い語る

細野豪志氏が書籍を出版

巨大津波と東京電力福島第１原発事故という未曽有（みぞう）の複合災害となり、多くの犠牲者が出た２０１１年３月11日の東日本大震災からきょうで10年。当時、原発事故収束担当大臣を務めていた衆議院議員・細野豪志氏はこのほど、当時の検証と復興への提案をまとめた書籍『東電福島原発事故自己調査報告　深層証言&福島復興提言：２０１１＋10』（編・社会学者開沼博、徳間書店）を出版した。当時を振り返るとともに、書籍に込めた思いを語ってもらった。

―震災から10年というタイミングで書籍を書いた理由は

10年を過ぎてしまうと、こうした問題はなかなか伝わりにくくなってしまうと思った。一つの区切りを迎え、原発事故の記憶の風化が懸念される今こそ、福島を国民に問うべきだと信じ、このタイミングで書籍に残すことを決意した。

―書籍を通じて国民に知ってほしいこととは

まずは、10年でよくここまで来たということ。原発への前線基地となったＪヴィレッジはサッカーの拠点として若者が集う場所となり、中高一貫校のふたば未来学園も創設された。10年前は現在のような姿はとても考えられなかった。ただ一方で、まだ多くの課題があるのも事実。処理水や除染土などの問題を乗り越えることは、福島のためだけでなく日本のためになる。また、リスクコミュニケーションは、新型コロナウイルスの問題につながる。ゼロリスクを求めるあまりほかの部分の犠牲が大きくなるということが原発事故であった。コロナの問題でも近い状態になっているので、その教訓を伝えることができれば。

書籍に込めた思いを語る細野氏

―同書では、「福島のために、わが国が乗り越えるべき６つの課題」として、処理水の海洋放出、除染土の再利用、甲状腺検査の見直しなどの課題の解決策を示している。これら課題を書くことへの思いは

さまざまな当事者との対話を通じ、福島の人間でない私が課題について書くことに迷いもあったが、10年で区切りをつけて次に向かわないと福島そのものの風評被害を払拭（ふっしょく）できない、前に進めないのではーと思い、覚悟を決めて書いた。

―原発事故から10年を振り返り、今思うことは

危機管理というのは政治の主要な仕事であり、そこに向き合わなければ政治家として意味がなく、どういった仕事ができるかが常に国民からも問われている。私自身、大学時代に阪神淡路大震災のボランティアに参加したことが政治に入るきっかけとなった。だからこそ、原発事故から逃げるという選択肢はなかった。当時の教訓をしっかりと踏まえた上で、これからも静岡で東南海地震などの震災が起きたらどうするかを考え、向き合える自分でありたいと思う。

―これからの福島の本当の復興をどう考えるか

10年前、福島に関わったことは運命だと思っている。残された課題の解決を一つ一つ実行し、復興に関わり続けることが私の次の10年の仕事。私は、福島のこれからは良くなると信じている。福島は人口減少の割合が低く、産業のアドバンテージがあるほか、不幸な事故によるマイナスをプラスに変えていく要素がある。プラスの部分をより伸ばしていくことで、福島に貢献できるのでは。また、浜通りの少子高齢化、過疎化といった課題を乗り越えることができれば、日本全国にそのモデルが活用できると思う。

―市民に向けて

震災発生後、静岡に帰ることができず、地元の皆さんに申し訳ない気持ちでいたが、半年ぶりに静岡に帰った際、ある富士市の支援者の方から「帰ってこなくてもいいから、今は福島のために働いてくれ」という言葉を掛けられた。その言葉が私を奮い立たせてくれた。「もし自分の地元・静岡で原発事故があったらどうするか」をイメージしながら福島に向き合うきっかけになった。２０１２年には、被災地のがれきが大きな問題になる中で鈴木尚前富士市長が岩手県のがれきを富士市で受け入れてくれた。私の地元で受け入れてくれたという事例があることで他自治体に説明に回ることができ、大きな自治体でもがれきを受け入れてもらえた。富士市は東京電力の管内でもある。誰一人として原発事故と無縁だと言い切れることはない。10年たってもう一度、富士市をはじめとした地元の人たちにも福島の問題を知ってほしい。

◇　◇　◇

『東電福島原発事故自己調査報告　深層証言&福島復興提言：２０１１＋10』は、税込み価格１８７０円。